



十二支の話



理事 土屋 みどり

今年の正月は穏やかなお天気に恵まれ、コロナ感染を心配しながらも行動制限はなく、初詣はどこも賑わっていましたね。

皆さんは十二支のはじまりという絵本を読んだことがありますか。むか〜しむかしのお話です。

山のとっぺんに楽しいことが大好きな神様がいて、「元旦に集まった12匹の動物を1年ずつ王様にする」というアイデアを思いつく。動物たちも王様になれると聞いて大興奮。しかし猫だけは、ネズミにうその日を教えられてしまう。大みそかの日から牛は出発、他の動物たちも、思い思いに出発して山を目指す。こうして、十二支の干支が決まり、神様と楽しく新年を祝った。次の日、猫は出発しようとして途中でリタイヤした狸に、日にちが違うことを教えてもらう。猫は怒り、それからというもの今でもネズミを追いかけるようになった。また、二度と寝坊しないように顔を洗うくせがついた。

ということです。簡単なあらすじですが、年始明けの保育園では大活躍する絵本の1冊です。

十二支は子(ね)・丑(うし)・寅(とら)・卯(う)・辰(たつ)・巳(み)・午(うま)・未(ひつじ)・申(さる)・酉(とり)・戌(いぬ)・亥(い)の総称であり、日本では干支が一番有名だと思います。

十干は甲(きのえ)・乙(きのと)・丙(ひのえ)・戊(つちのえ)・己(つちのと)・庚(かのえ)・辛(かのと)・壬(みずのえ)・癸(みずのと)です。

実際の干支の意味は「十干(じっかん)」・「十二支(じゅうにし)」を加えたものを指します。昔では、現在のような年を表すものではなく、月や時刻といったものまで表すのに使われていました。

ちなみに中国では陽が奇数で、陰が偶数と考えられているようで、このように十干と十二支の組み合わせは、古代中国の陰陽五行説から来ており、簡単に言うなら時間のとらえ方を指しています。

文化的なお話になると、中国の戦国時代に鄒衍(すうえん)という学者が陰陽五行説を唱え、そして十二支古星術を世に広めるためにわかりやすく12の動物を選んだようだとわれています。また、十二支は特定の年月日を示すものとして日本に伝わり、独自の文化をもたらしたといわれています。

日本では、古くから動物を神の使いとするいわゆる動物信仰があったので、それと十二支が合わり、今のように伝えられるようになったとのこと。

日本でも地方ごとに言い伝えがあるほか、世界を見渡してみると中国・朝鮮半島・モンゴルがある中央アジア・ロシアなど同様の物語が存在しているようです。

今年の干支は卯(う)ですが、うさぎは飛び跳ねることから飛躍の年になることでしょう。